

問題 次の文章は、森鷗外の「舞姫」の一節です。エリスの家族と暮らし始めた余（太田豊太郎）のもとへ、親友の相沢謙吉から、天方伯に会いに来るようにとの連絡があり、伯と会った後、余は相沢と昼食をとりながら、話をします。以上を踏まえ、本文を読んで後の問いに答えなさい。

（解答は解答用紙に書きなさい。なお、問題も解答用紙にあります。）

① 食卓にては彼多く問ひて、我多く答へき。彼が生路はおほむね平滑なりしに、轆轤数奇なるは我身の上なりければなり。

余が胸臆を開いて物語りし不幸なる閱歴を聞きて、彼はしばしば驚きしが、なかなかに余を譴めんとはせず、かへりて他の凡庸なる諸生輩を罵りき。されど物語の終はりしとき、彼は色を正して諫むるやう、この一段のことはもと生まれながらなる弱き心より出でしなれば、今更に言はんも甲斐なし。とはいへ、ガクシキあり、才能あるものが、いつまでか一少女の情にかかづらひて、目的なき生活<sup>なりはひ</sup>をなすべき。

今は天方伯も唯だ独逸語<sup>ドイツ</sup>を利用せん<sup>あまた</sup>の心のみなり。おのれもまた伯が当時の免官の理由を知れるが故に、強ひてその成心を動かさんとはせず、伯が心中にて曲庇者<sup>きよくひしや</sup>なりなんと思はれんは、朋友に利なく、おのれにソンあればなり。人を薦むるは先づその能を示すにしかず。これ<sup>イ</sup>を示して伯の信用を求めよ。またかの少女との関係は、たとひ彼に誠ありとも、たとひ情交は深くなりぬとも、人材を知りての恋にあらず、慣習といふ一種のダセイより生じたる交はりなり。意を決して断てと。これその言のおほむねなりき。

大洋に舵<sup>かち</sup>を失ひし舟人が、遙かなる山を望む如きは、相沢が余に示したるゼント<sup>エ</sup>の方針なり。されどこの山はなほ重霧の間に在りて、いつ往き着かんも、否、果して往き着きぬとも、我が中心に満足を与へんも定かならず。貧しきが中にも楽しきは今の生活、棄<sup>す</sup>て難きはエリスが愛<sup>②</sup>。わが弱き心には思ひ定めん由なかりしが、しばらく友の言に従ひて、この情縁を断たんと約しき。余は守る所を失はじと思ひて、おのれに敵するものには抗抵すれども、友に對して否とはえ答へぬが常なり。

別れて出づれば風面<sup>おもて</sup>を打てり。二重の玻璃窓を緊しく鎖<sup>とぎ</sup>して、大いなる陶炉に火を焚<sup>た</sup>きたるホテルの食堂を出でしなれば、薄き外套を透<sup>とほ</sup>る午後四時の寒さは殊<sup>こと</sup>さらに堪へ難く、膚栗立つと共に、余は心の中に一種の寒さを覚えき。

翻譯は一夜になし果てつ。カイゼルホーフへ通ふことはこれより漸<sup>やうや</sup>く繁<sup>しげ</sup>くなりもて行く程に、初めは伯の言葉も用事のみなりしが、後には近頃故郷にてありしことなどを挙げて余が意見を問ひ、折に触れては道中にて人々の失錯<sup>しつさく</sup>ありしことどもを告げて打笑ひたまひき。

一月ばかり過ぎて、或る日伯は突然我れに向ひて、「余は明旦<sup>あす</sup>、魯西亞<sup>ロシア</sup>に向かひて出発すべし。随<sup>したが</sup>ひて来べきか、」と問ふ。余は数日間、かの公務にいとまなき相沢を見ざりしかば、此問ひは不意に余を驚かしつ。「いかで命に従はざらむ。」<sup>⑤</sup>余は我が恥を表はさん。この答へはいち早く決断して言ひしにあらず。余はおのれが信じて頼む心を生じたる人に、卒然<sup>そつぜん</sup>ものを問はれたるときは、咄嗟<sup>とつさ</sup>の間、その答へのハ<sup>オ</sup>ン<sup>オ</sup>イ<sup>オ</sup>を善くも量らず、直ちにうべなふことあり。さてうべなひし上にて、その為なし難きに心づきても、強ひて当時の心虚<sup>うつろ</sup>なりしを掩<sup>おほ</sup>ひ隠し、耐忍してこれを実行することしばしばなり。

此日は翻譯の代<sup>しろ</sup>に、旅費さへ添へて賜りしを持て歸りて、翻譯の代をばエリスに預けつ。これにて魯西亞より歸り来んまでの費<sup>つひ</sup>えをば支へつべし。彼は医者に見せしに常ならぬ身なりといふ。貧血<sup>さか</sup>の性なりしゆゑ、幾月か心づかでありけん。座頭よりは休むことのあまりに久

しなければ籍を除きぬと言ひおこせつ。まだひと月ばかりなるに、かく厳しきは故あればなるべし。旅立ちの事にはいたく心を悩ますとも見えず。偽りなき我が心を厚く信じたれば。

(注)

\*生路 人生。

\*轆轤 不遇。不運。

\*胸臆 胸の中。

\*諸生輩 豊太郎を中傷した留学生達。

\*成心 先入観。

\*曲庇者 道理を曲げて人をかばう者。

\*陶炉 陶製の暖炉。

\*カイゼルホーフ 天方伯の泊まっているホテル。

\*うべなふ 承諾する。

\*座頭 エリスが働いてる劇場の支配人

問一 傍線部ア～オのカタカナを漢字に改めなさい。

ア ガクシキ

イ ソシ

ウ ダセイ

エ ゼント

オ ハンイ

【 】

【 】

【 】

【 】

【 】

問二 傍線部あ～おについて意味を簡潔に説明しなさい。

あ なかなかに

い 色を正して

う これその言のおほむねなりき

え いかで命に従はざらむ

お 言ひおこせつ

問三 二重傍線部①「食卓にては彼多く問ひて、我多く答へき」とあるが、なぜ「我」の方が多く答えることになったのか。その理由を簡潔に述べなさい。

問四 二重傍線部②「わが弱き心には思ひ定めん由なかりしが、しばらく友の言に従ひて、この情縁を断たんと約しき」とあるが、なぜそのような約束をしたのか。その理由を簡潔に述べなさい。

問五 二重傍線部③「一種の寒さ」とあるが、どのような寒さか。この時の主人公の気持ちを簡潔に述べなさい。

**問六** 二重傍線部④「打笑ひたまひき」とあるが、天方伯のこのような行動は、何を意味するのか。**※昨年度の試験問題です。**

**問七** 二重傍線部⑤「我が恥」とあるが、それはどのようなことか。簡潔に説明しなさい。

**問八** 本文の内容の説明として正しいものはどれか。次の**1**～**5**から一つ選び、番号を丸で囲みなさい。

- 1** 豊太郎はエリスとの生活に限界を感じ、別れたいと思っている。
- 2** 豊太郎は天方伯の誘いが最後のチャンスだと知っていたが、申し出を拒絶した。
- 3** 豊太郎はエリスへの思いを断ち切る決心が付かないまま、まわりに流されている。
- 4** 豊太郎は相沢の友情に感謝するとともに、その友情にすぎるほかないと覚悟している。
- 5** 豊太郎は故郷である日本に帰るためには、全てを捨てるほかないと決心している。

**問九** 今回引用した問題本文の内容に関する解説として正しいものはどれか。次の**1**～**5**から一つ選び、番号を丸で囲みなさい。

- 1** 豊太郎は相沢・天方伯との人間関係について詳しく語ることで、自分が下した決断が熟慮の結果だと主張している。
- 2** 豊太郎はエリスの愛情がすでに自分には向いていないことを暗示することで、いざれ別れることになることを予告している。
- 3** 豊太郎は当時のドイツと日本の違いについて語ることで、自分は日本人として判断したのだと述べている。
- 4** 豊太郎は自分の優柔不断な性格について繰り返し語ることで、自分の行動がやむを得なかったのだと言い訳をしている。
- 5** 豊太郎は物事を決断することの難しさを語ることで、この後に起こる出来事を正当化しようとしている。